

日本トイレ協会メンテナンス研究会公式HP



報告レポート(第106回)



定例会の様子をレポートします。

2006年6月12日(月) 16:00~18:00
TOTOプレゼンテーションルームにて(東京都新宿区)

テーマ:「世界のトイレ快道を行く~南アフリカ編~」
南アフリカの民族性が育てた自然環境保護と観光客への対応

講師:坂本菜子(坂本菜子コンフォート研究所代表)

■1.南アフリカは「アフリカらしくない国」

南アフリカ共和国に暮らす人々のルーツをたずねると、2つの先住民にたどりつきます。ところが、1652年にオランダ人が植民地をつくって以降、フランスやドイツ、イギリスなどのヨーロッパ系移民が相次ぎ、さらにアジアからも人々が移入するにつれ、この国は“多民族国家”に変貌します。

こうして「アフリカで最もアフリカらしくない国」として世界に類を見ない独特の民族と文化をもつようになった南アフリカは、自然や動物、環境を伝統的な知恵でさりげなく守りながら、同時に観光立国としての地位もゆるぎないものになっています。

■2.観光地のトイレで感じた南アフリカらしさ

サイモンズタウンという街の南端に隣接する静かな入り江は、野生のケープペンギン保護区として知られています。ケープペンギンはアフリカ大陸に生息する唯一のペンギンで、繁殖活動が盛んに行われているこの区域には3000羽余りが生息しています。

この保護区では海岸沿いにウッドデッキの遊歩道が整備されており直接ペンギンに手を触れることがないためか、子どものペンギンも人をあまり怖がらず親ペンギンの傍でゆうゆうと育っている様子。観光客もペンギンたちの生活をゆっくり間近に楽しむことができます。自然体でなおかつ自然環境へのきめ細かな気遣いに、私はうれしさを感じました。

各観光地のトイレでも、ベビーベッドや大きなダストボックス、ナプキン袋、消臭剤などに細やかな気配りを感じました。またショッピングセンターのトイレでは、ヨーロッパに近い雰囲気はあるものの、アフリカの色彩や夢を感じさせるこの国独特の壁面デザインが、強く印象に残りました(写真1)。

■3.ケープのトイレには窓がある

自然環境を愛する民族性が育てたトイレのもう一つの特徴は、何処のトイレに入っても、窓があることです。自然の風が流れ、外の景色を楽しむ事も出来ます。

喜望峰を望む、ケープポイントの観光客用のトイレには、男性・女性トイレ、車椅子(障害者用)トイレにも、上げ下げ窓が設置されていました。よく日本では一面タイル張りの広くて物寂しささえ感じるトイレもありますが、



ショッピングセンターのトイレ壁面デザインにも南アフリカらしさが・・・。



南アフリカのペンギン達。ゆうゆうと生活しているのが羨ましい。



窓のあるトイレのオムツ交換ベット。そよ風を感じる・・・。



ワイナリーのトイレは、木のぬくもりを感じる。

ここでは上部3箇所にも窓が設置されていました。

ベビーベットの置かれた横の窓からは、そよ風や光もふりそそぎ、さぞオムツを替えるお母さんも赤ちゃんも心地好い瞬間を感じているだろうと想像できました。

■4. 木を豊富に使った窓のある、ワイナリーのトイレ

ケープタウン市内から車で30~40分のところにあるステインボシュには、ワイナリー(ワインランド)があります。数件を尋ね、ワインを試飲し、トイレを拝見しましたが、オーク(木の名前・町に並んでいるシンボルの存在)の町と言われるだけあって、天井のデザイン、窓枠、扉に木が豊富に使われていた。

しかもどのトイレにも上げ下げの窓があり、自然光の入る、ホッとする空間でした(ただ一つ小柄の日本男性には、小便器の位置が高くてご苦労があったと聞きました)。

■5. アフリカ気分浸れた「ママ・アフリカ」のトイレ

「ママ・アフリカ」は、ケープ料理とアフリカ料理のレストランで、外観もインテリアも个性的でアフリカを充分感じられる場所です。店の外観はアフリカ色豊かなデザイン。それは店の周りに置かれている植木鉢・カウンター・各部屋のインテリアの装飾、全ての食器にいたるまでアフリカデザインが生かされていました。そればかりではなく食事の前にはこの地の風習で「手洗いの儀式」が行われました。

このトイレで驚いたのは、トイレの派手さです。3か所のトイレともアフリカの色彩デザインが思う存分使いこなされていて、個性あふれるデザインで、しかもやはり狭いトイレにも「窓」があったことです。

■6. テーブルマウンテンに設置された「エコトイレ」

ケープタウンを一望できるビューポイントとして知られるのは、平らな頂上が印象的な「テーブルマウンテン」。標高1086mの“岩盤”の頂上まではドイツ製(?)の65人乗りロープウェイが運んでくれますが、それがなんとドーム型(円形)! しかも床が360度回転しながら頂上に向かうので、どの位置に乗っても大西洋や街の風景さらには山の頂上までもが眺望できるという“すぐれもの”でした。

テーブルマウンテンは全体が国立公園となっており、150種類の植物や小動物が生息しているとか。その一つで「ロック・ダッシー(Rock Dassie)」と呼ばれる小動物に出会えたのは幸運でした。大きさ30~40cm、モグラ、リス、ネズミ、ウサギ、ウオンバットを合わせたかのようなこの動物は、なんとゾウの仲間と聞き、そういわれても納得のいかない不思議な容姿の「ロック・ダッシー」も、岩の間から姿を現し観光客を喜ばせ、自然と共生しているようでした。

それだけではありません。このテーブルマウンテンのトイレが実は「エコトイレ」でした。短時間の見学で詳しい観察は困難でしたが、ガイドさんの説明によるとオガクズと微生物の使用による生物処理方式とのこと。日本でもここ数年環境対策の一環として山岳トイレなどに使われ始めている、下水道や浄化槽処理などを必要としない、いわゆる「自己処理型」に近いものと想像できました(写真2)。



レストラン「ママ・アフリカ」の店内



レストラン「ママ・アフリカ」のトイレ
派手なトイレだが、愛らしい。



テーブルマウンテンには生物処理方式のエコトイレが設置されていた。



手洗い水には山の自然水“マウンテンウォーター”が使用されている。

日本ではエコトイレを処理方式で大別すると化学処理、生物処理、物理処理の3種類がありますが、ここテーブルマウンテンで生物処理方式が使われているとは、まさかの驚きでした。しかも小便器は無水式が使われ、手洗い水洗には“マウンテンウォーター”のサインがあって、山から湧き出す自然の水を使っていることを実感しました(写真3)。
こうして南アフリカで自然環境保護と観光の“共生”を実体験できたのは、想像以上の収穫でした。

日本で富士山が世界遺産登録の選に漏れた一件は、不法投棄のごみが目立ち、用足し後のティッシュペーパーが散乱していることにその一因があるといわれます。現在富士山では、官民をあげて環境再生と環境保全のための対策を実施していますが、早い時期に世界に誇れる山となることを願っております。

[TOP](#)[BACK](#)[トップ
へ](#)[戻
る](#)